



TITLE:

# 西歐思想に於ける東洋社會論の意義

AUTHOR(S):

島, 恭彦

---

CITATION:

島, 恭彦. 西歐思想に於ける東洋社會論の意義. 東亞經濟論叢 1941, 1(3): 619-635

ISSUE DATE:

1941-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128671>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學部 東亞經濟研究所

第四回(二月十五)發行

# 東亞經濟叢論

第壹卷 第參號

昭和十六年九月

上海に於ける金融機構……………	經濟學博士 小島昌太郎
中晚唐時代に於ける燉煌地方 佛教寺院の礎礎經營に就きて……………	文學博士 那波利貞
支那古代經濟史概觀……………	經濟學士 穗積文雄
支那國家銀行の統制力……………	經濟學士 德永清行
西歐思想に於ける東洋社會論の意義……………	經濟學士 島恭彦
滿洲に於ける特殊會社の再組織問題……………	經濟學士 山本安次郎
滿洲貿易構成の變化……………	經濟學士 岡倉伯士
ハウスホーファアの東亞文化政策……………	經濟學士 出口勇藏
買辦發生の社會的根據……………	經濟學士 鈴木総一郎
東亞經濟圈に於ける米生産の發展……………	經濟學士 大上末廣
北京回教徒の職業……………	經濟學士 澤崎堅造
支那紡績勞働請負制度の發達……………	經濟學士 岡部利良

(禁轉載)

書肆 有斐閣 發賣

## 西歐思想に於ける東洋社會論の意義

島 恭 彦

私はかう云ふテーマの下にこゝで何か大膽な斷定を下さうとしてゐるのではない。たゞいままでの研究から得られた一應の結論を述べると同時に、將來この方面に關する研究にある見通しをつけようと思つてゐるに過ぎない。

私は元來、東洋社會を科學的に考察するには、先づ西歐思想より東洋社會を觀ると云ふ思惟の方向と、次に東洋社會より西歐思想を觀ると云ふ思惟の方向とが必要だと思つてゐる。吾々はこれまで東洋社會と西歐思想とをそれ／＼切り離して考へる習慣をつけられて來た。これは吾國に於て東洋の研究に従事する學者と、近代的西歐思想、殊に社會經濟思想の研究に従つてゐる學者との間に、殆んど絶望的な距離があつたためでもあらう。けれども一つの明かな事實として吾々が承認しなければならない事は、西歐思想が科學的な體系をそなへ始めた近世の初頭以來、東洋社會と西歐思想とはたえざる關係にあつたと云ふ事である。東洋社會は西歐思想に滲過されてはじめてまとまつた形として人々の前にあらはれ、西歐の合理的思惟は東洋社會の存在によつてたえず自己批判の

材料を與へられて來た。従つて東洋社會を理論的に分析する上に於ても、また西歐思想の性格を具體的に理解する上に於ても、その兩者を互に密接な相互關係に於て考へる用意がなくてはならない。

## 二

先づ西歐思想より東洋社會を見る事、これは吾々東洋人にとつて極めて手數のかゝる迂回的な方法であると思はれるかも知れない。東洋人は東洋社會を自分自身の問題として直視すればよいのであつて、何も好んで西洋人のものゝ見方や、或は西歐的偏見であるかも知れない様な見地に立つて東洋社會を觀察する必要があるまい。これは確かに理由のある主張である。併しいま率直に認めねばならない事は、吾々東洋人、特に日本人はさう簡単に「ヨーロッパ的」なもの見方から脱却出来る様な状態におかれてゐないと云ふ事である。これは吾々日本人にとつて不幸であるかどうかあまりに早急な斷定は下されないだらうが、とにかく明治維新以來印度や支那や其他アジアと呼ばれる世界よりも、むしろ西洋の方に接觸し乍ら發達して來た日本に於て、吾々は先づアジアの言葉や思想よりもヨーロッパのそれの方に一そう親しみを感ずると云ふ奇妙な状態におかれてゐるのである。そればかりではない。これまで東洋社會を多少とも科學的に觀察しようとするものにとつて、最も手近に與へられてゐる認識上の武器は東洋の思想ではなくて西歐の思想であつた。何故なら西歐思想は近世の初頭以來、東洋社會の認識に於て有力な傳統を持つてゐるからであり、吾々はさう云ふ傳統に對して一應敬意を拂はねばならないからである。もしも吾々の東洋社會觀に何か西歐的な偏見が現れてゐるとしたら、批判されねばならないのは西歐思想ばかりではなく、西歐思想の圖式を機械的に適用し、西歐的偏見に無意識裡に陥つてゐる吾々日本人もまたさ

うである。

扱、吾々はまづ西歐思想に對して東洋社會の科學的研究の領域に於けるパイオニアの榮譽を與へてよいと思ふ。近世の西歐思想が何故に東洋社會の研究に先鞭をつけたかについては、まづ近世ヨーロッパの東洋に對する特殊な働きかけを考へねばならない。東洋と西洋とは勿論古代から中世を通じて、陸路や海路により、また平和裡に闘争裡に、互に交渉し合つて來た。併し近世ヨーロッパの東洋に對する働きかけは、それ以前のものとは本質的に異なるものであつた。第一に近代の造船技術と航海技術とによつて、ヨーロッパの東洋向航路は著しく安全となり、時間的にも短縮され、航海の度數は一そう頻繁になつた。またヨーロッパの船に乘組んだものはやはりロマンチックな冒險家や投機的な商人であつたが、彼等は近世のヨーロッパに生れた科學的知識を身につけて東洋の自然や風物をつぶさに觀察する能力をもつてゐた。

たゞ十五世紀から十七世紀にかけて近世ヨーロッパの商業資本家の東洋と西洋とを結ぶ活動は外面的であり、非組織的であつた。この商業資本家達は自分達の背景に格別有力な生産力を持たずに、たゞ東洋の珍しい財貨をヨーロッパに賣捌いて莫大な商業利潤を収めると云ふ單純な仲介的業務を營んだにすぎない。彼等が東洋に求めたものは、せいぜいこのところ貿易の據點が薪炭や飲料水の供給地にすぎなかつた。従つてこの時代のヨーロッパ人の東洋に對する觀察は散漫であり、皮相的であつたのは當然である。

ヨーロッパは、乍併かような段階に何時までもとどまつてゐたわけではない。十八世紀より十九世紀にかけて西歐の天地に急速に傳播した技術的革命、それにもとづく大工場制の成立、殊に石炭の利用と鐵の精鍊、紡績工

程の機械化、蒸氣機關の利用、勞働工程の組織化等々、ヨーロッパはかうして産業資本の活動時代となり、大量的に生産された商品は市場を求めて海外に流れ出した。産業資本はまた商品市場のみではなく、原料の獲得のためにも世界を探索してまわらなければならなかつた。恰も産業資本回轉のリズムに押出される様に、軍艦と商船隊とが東洋を訪れ、資本と武器との壓力の下に到る處で破壊し、建設し、探險し、調査した。暴力的な植民制度と獨占的な特權會社との排除の後に現れたこの旺盛にして組織的なヨーロッパの東洋に對する働きかけの中に、徐々に東洋社會の姿が明るみに出されたのであつた。ヨーロッパと東洋との關係はもはや單純な商業的、外面的なものではなかつた。ヨーロッパの商船はたゞ商品だけを積んでゐたのではなく、近世の西歐に生れた新しい科學を滿載した學術調査隊でもあつた。即ち市場や原料の産地を求め、東洋人の社會と風俗とを研究し、自然や風土を調査するために、動植物學者、地質學者、土俗學者、氣象、天文學者等々を集め、また各地の政權と交渉するために外交官や其他行政官を伴ふてゐた。十九世紀の初頭以來、東洋に關する地理學的、土俗學的、社會誌的研究が公けにされ始めたのはかう云ふ理由によるのである。

東洋を訪れたヨーロッパ人は自然科學ばかりではなく、社會を科學的に見る眼をも持つてゐた。恰も産業資本の勃興期は同時にヨーロッパ社會の變革の時代であつた。ヨーロッパの到るところで、封建制度や專制主義等が破壊され、新しい秩序が建設されつゝある時代であつた。ヨーロッパ人はこの變革の時代に舊制度を批判し、新しい環境を作り出さうとする能動的な態度と知性とを身につけた。彼等はいふなり社會を批判的に動的に考察する科學的の眼をもつ様になつたのである。一定の社會理論を身につけたヨーロッパ人が、東洋社會に對していだい

てゐる問題や見地は、當時の東洋人がヨーロッパの人間や文化に對していだいたそれとは全く異つた水準にあつた事は言ふまでもない。東洋人が西洋人を禽獸視し、ヨーロッパの文化を魔術視したのと反對に、ヨーロッパ人は東洋の社會や風俗や民衆生活を即物的に現實的に觀察した。そればかりではなく、ヨーロッパ人はたゞ／＼途上で見かけた個々の事象もこれを單に孤立した珍奇な現象とはせず、ヨーロッパの同様な事象と比較し、これをやがて普遍的、世界史的な聯關にまでたかめて、そこからその事象の意味を評價すると云ふ方法を知つてゐた。例へば彼等の觀察した東洋人の生活や行爲の特徴をヨーロッパに比較して良き或は惡しき東洋の政治から説明すると云つた様な方法である。斯様な思惟の様式はこの時代の東洋人の思想には甚だ稀れにしか見出されなかつたものである。これはしば／＼ヨーロッパ的圖式主義の原因ともなるものであるけれども、而も當時のヨーロッパ人の東方旅行記に理論的な深みをそへてゐるものと云へよう。

### 三

吾々はヨーロッパ的東洋觀の一例として、まづシーボルトの日本旅行記をあげよう。彼は西紀一八二三年（文政六年）、オランダの商館長とともに日本に派遣された。オランダ政府はフランス革命後イギリスやフランスの東洋進出によつて頓挫しかけた對日本貿易を回復するために、新に日本の風土や人民を研究する必要を感じて、萬有學の知識をもつた醫師シーボルトをえらんだのであつた。かようにシーボルトの派遣の裏には、ヨーロッパ資本の東洋進出に對する意欲があつた事を看過するわけにはいかない。シーボルトは長崎より江戸への旅行の道で日本の自然、動植物等を調査する傍ら、徳川封建下の政治、法律、經濟、風俗、民衆生活等の各方面にわたりつ

ぶさに觀察してゐる。殊に當時の日本の社會經濟について、次の様な興味ある記録が見られる。耕作地は一つの雑草もなく、一つの小石もなく、日本農民の驚くべき勤勉さを示してゐる事、労働者と工場主とはヨーロッパに於けるより一そう峻嚴な格式によつてへだてられてゐるが、尙その間に家族的な共同關係がたもたれてゐる事、<sup>1)</sup>一時間一石の收入あり」と云はれる萩の富豪も社會上の格式から見ると農民よりも低い地位にある事、但し將軍や藩侯に御用金を調達すれば苗字帶刀を許されて、日本のロスチャイルドとなり得る事、<sup>2)</sup>江戸は大消費都市で生活必需品の値高く、貧富の懸隔甚しく、而も遊佚の風がみなぎつてゐて眞面目な修學の場所ではない事、<sup>3)</sup>これらは極く斷片的な紀行文風の觀察にすぎない。それにも拘らず、これらの觀察の中に何か鋭いものゝ見方を感じるのは何故だらうか。それは個々の特殊な日本の社會經濟事情が、たゞそれだけのものとして孤立させられる事なしに、ヨーロッパの社會經濟事情と比較されて、それ〴〵の意味が評價されてゐるからであらう。

勿論シーボルトは吾國の封建社會についてしばしば皮相の觀察を下してゐる場合がある。例へば大名行列に向つて、人民が恭々しく土下座するのは日本國家の法律秩序がヨーロッパに比して遙かによくたもたれ、人民が皆諸侯に對して敬虔の念をいだいてゐるからであると云つてゐる。單に外面的な秩序が保たれてゐると云ふ理由で、當時既に幾多の矛盾を累積しつゝあつた吾國の封建制度を賞讃するのは誤であると云はねばなるまい。併し吾々はシーボルトの眞の意向がどこにあつたかを見よう。「我等が時に日本の人民國家を視察するに際して、ヨーロッパに於けると同様な事態と嚴正に比較し、また評議するを敢てするは、決して心惡しき目途ありてする事とならず。却つてヨーロッパ以外の古き世界なる最も文明なる國民には、恐ろしき士民戰爭、宗教戰爭の後に二

1) シーボルト、江戸參府紀行（吳秀三譯註）三九九頁。

2) 同書、三三五頁。

3) 同書、三三五頁。

4) 同書、五二三頁。



百年の太平を享受して國家制度に於ても士民制度に於ても將又宗教組織に於てだに、我々が模倣を要することはなくとも、之を顧慮し又尊重すべきものあるを確信したるによりてかくは爲たるなり。<sup>5)</sup>これは恰もフランスの啓蒙期に於けるヴォルテールやケネーの支那禮讃論とも比較出来る言葉である。併し吾々はこゝで承認しなければならぬ事は、シーボルトがヨーロッパ社會と日本の社會とを「嚴正に比較し」得る立場にあつた事、それ故にかゝる普遍的、世界史的立場から日本社會の特殊事情に照明を與へてその意義を明かにする事が出来たことである。この態度と方法とはやがて東洋社會の理論を形成する素地となるものであらう。

#### 四

吾々は更にシーボルトに先立つこと約二十年前、カムチャツカ——日本——廣東を結ぶ航路を辿つたロシアのクルウゼンシュテルンの東洋見聞記に、ヨーロッパ的東洋觀のもう一つの例を見出すのである。

クルウゼンシュテルンの航海の背景には次の様なこの世紀の歴史的狀勢が指摘されてゐる。十八、九世紀の交にイギリスと結び商業資本の時代より産業資本の時代へと前進しつゝあるロシア、十八世紀の半ばより展開しつゝあるロシアの北太平洋貿易、特にカムチャツカを中心とする毛皮貿易、更にロシア使節レザノフの日本訪問等々、要するにこの時代のロシアは貿易の據點を求めて極東を南下せんとする態勢を示してゐた。勿論ロシアの極東貿易はたゞ商業資本的活動の域を出ず、偶然的、消極的であり、東洋を商品市場としても、原料の供給地としても明確に認識してゐなかつた。この點より見ると、當時のイギリスに比較してロシアはまだ著しく後れてゐた。併しクルウゼンシュテルンその人は既にイギリスやアメリカに渡航し、新時代の思想と政治とを理解し、ま

5) 前掲書、三五三頁。

たイギリスの軍艦に乗組んで印度や支那貿易の如何に有利であるかを實地に見聞した經驗を持つてゐるので、彼の記録からは多分に近代ヨーロッパ資本の積極的な意欲を感じる事が出来る。彼の意圖は從來ロシアの極東貿易を獨占してゐたイギリス、スウェーデン等の勢力を排し、ロシア自らこの貿易より利益を収める事であつた。彼はかう云つてゐる。

「ロシアもまた支那及び印度との海上貿易に参加し得るといふ事は、予には不可能であるとは考へられなくなつた。海上貿易を行ふヨーロッパ諸國民の大部分は、このあらゆる自然資財に富むこと大なる諸地方との貿易に多なり少なり參加して來てゐる。そして彼等のうちこの方面を特に開拓するに成功してゐるものは、またつねに高度の繁榮を實現してゐるものである。」

クルウゼンシュテルンの計畫は、從來までロシアの貿易商人が北太平洋より毛皮類をオホオック海からキヤフタ經由で二ヶ年の長年月を費して支那に運送してゐたのに對して、直接海路で廣東に運び莫大な利潤を収めた後支那商品及びマニラ、バタヴィア、印度海岸より確實に利益多く賣捌ける商品を積込んで歸航する事の出来るような航路を開く事であつた。斯様な意圖をいだいて航海にのぼつたクルウゼンシュテルンの眼に東洋社會はどのようなに映じたか。

彼はまづ水深や潮流や天文や其他沿岸地方の地理を觀測し調査しつゝ、カムチャツカより南下して一八〇四年（文化元年）長崎港を訪れた、併しこゝでは使節派遣の事もその他一切のロシアとの交渉も拒絶され、クルウゼンシュテルンをして「江戸の内閣に、または進んで日本の政府そのものに一大變革の起らない限り、この形勢は動かされない。」と嘆息せしめた。こゝで所謂變革とは何を意味するか明かでないが、とにかくヨーロッパの舊社會

6) クルウゼンシュテルン、日本紀行（羽仁五郎譯註）上卷二八頁。  
7) 前掲書、二二九頁。

を變革した資本は、また通商を拒絶する東洋社會をも「自己の姿に似せて」變革しようとしてゐる事實が窺へるのではなからうか。クルウゼンシュテルンの一行は支那に於てもしばし冷遇されたが、こゝでは日本と反對に比較的詳細に政治經濟事情を観察する事が出来た。殊に豫算討論員ヴュルスト卿の彼に授けた支那調査項目に於ける着眼點、及びこれに對するクルウゼンシュテルンの解答には、ヨーロッパ資本の實踐的意欲に近いものが感じられるばかりではなく、さらに支那社會に對する非凡な西歐的研究態度が現れてゐる。

ヴュルストの調査項目は二十四に分れてゐる。これを簡単にこゝに摘記して見れば、まづ支那に於ける金利、信用狀態、爲替、郵便、度量衡制度、債權、債務及び破産の法律的處置、商業取引狀態、商業地、貿易港、交通運送の狀態、支那人の工藝技術、同業組合の存否及びその法規、大工場の存否及び親方、職人、徒弟の關係、手工業者、農民、勞働者の地位、土地所有及び小作料、支那人の主食食物、人口、生兒殺害の風習、支那の富豪、奴隸制度及び賦役制度の存否、支那皇帝の收入等である。われ／＼は更にこの中の重要な項目をえらんで、これにクルウゼンシュテルンの解答を對照させて見よう。こゝでは勿論なるべく簡単にするために、原文の冗長な部分は省略する。

奴隸制または賦役制は現存するか。

答。支那には奴隸制現存せず。支那人は出生の時より自由で、富者も貴族も彼等の使用する勞働に對しては支拂はねばならない。併し親がその兒を賣ることは通常の事である。併し賣られた彼等は成年にならない間は奴隸狀態にあるが、成年に達すると自由市民の階級に加へられる。但し支那の女性はすべての東洋諸國に於けると同様に、ヨーロッパ文明國に於けるような尊敬をうけず、彼女等が賣却されて奴隸となつた場合は、通常生涯の間その狀態を脱することは出来ない。

支那の富豪は地主なりや商人なりや。

答。支那に於ける富豪は通常商人の身分の者で、特に鹽の販賣を請負ふものに多い。この他に<sup>コメ</sup>行の組合員たる商人が最も富裕であると云はれてゐる。一般に支那には大土地所有者なしと云ふ。

支那に同業組合ありや。

答。すべての手工業者は結合によつて結合せられ、そして之に長老がある。廣東では各種の組合は自己の街路さへ所有してゐる。例へば裁縫業者のみの住む街、靴屋の街、硝子屋の街、藥種屋のみの住む街等、彼等は各自の祝祭を持つて之を催すのが常である。

貴族は一代制か、世襲制か。

答。支那には世襲貴族なし。併し支那に於ても孔子の子孫は一定の位階を世襲的に持つてゐる。

大工場ありや。

答。支那には諸大工場がある。例へば、廣東附近の陶磁器製造の工場の如し。併し絹、木綿、其他支那より輸出される商品の大部分は個々人の製作品である。政府自らヨーロッパ諸國に於ける様に大工場を支持する事は支那にはなからうと思はれる。

支那皇帝の主要な収入は地租にありや。

答。支那皇帝の最大収入は地租であり、あらゆる作物の一分を物納させる。<sup>8)</sup>

吾々の引用はこれ位で打ち切りとしよう。これ以外の調査項目及び解答の多くは、支那の商慣習、商引の法規、運送等に關するもので、専ら支那に對する商業資本的關心を示すものが多い。併し以上に拔萃した支那の社會經濟に關する部分は、奴隸制、ギルド制、貴族制其他あらゆる舊社會の桎梏を打破つて新しい産業社會を建設したヨーロッパの産業資本、從つてまたその力を背景とする新しいヨーロッパ的社會理論にして始めてもつ事の出来る問題と關心とをそのまゝ現はしたものである。從つて大部分の支那人はヴェルストの調査項目に對して満足な

8) 前掲書、下卷三九五—四一五頁。

9) 拙稿、啓蒙時代の支那研究とその現代的意義（經濟論叢、48卷6號）。

解答を與へる事が出來ず、止むを得ず廣東在住のヨーロッパ人の報告にまたねばならなかつたと、クルウゼンシュテルン自ら書いてゐる。私はこの點について、かのフランスの經濟學者チュルゴオが「支那に關する設問」について、支那人留學生を彼の問題に答へ得る様に啓蒙するため、「富の生産と分配に關する省察」を書いたと事ふ事情を想起するのである。いづれも東洋社會について東洋人より西洋人の方が遙かに早く理論的な關心をいだいてゐたと云ふ事實を示すものではないか。

吾々が以上シーボルトとクルウゼンシュテルンとの東洋見聞記を例にあげたのは、十八世紀末から十九世紀へかけて西歐の東洋に對する働きかけそのものが、東洋の科學的研究の地盤となつた事を明かにしたいからであつた。勿論この時代に東洋に働きかけたヨーロッパの産業資本國としては、シーボルトやクルウゼンシュテルンの代表するオランダ、ロシアよりも、まづイギリスを第一位におさねばならない事は明かである。イギリスはこゝに改めて述べるまでもなく、印度の植民的經營に最も古い經驗を持ち、そこから西歐思想の轉回に役立つような重大な資料を汲出した。これについては、また何かの機會に觸れる事もあるだらう。たゞ吾々はこゝで云はゞ近世ヨーロッパの東洋進出の第一線部隊が如何に東洋社會を認識したかについて極く僅かの例を述べたに止まる。それ等は西歐思想の體系によつて濾過される以前の素材であるが、而もその素材を獲得する認識の過程に於て既にはつきりと西歐思想の特色が現れてゐる事を指摘したまでである。

## 五

さて、吾々はいまゝで西歐思想より東洋社會を觀る事の意義について述べたが、次に吾々は立場を變へて東洋

社會より西歐思想を見る事の意義について述べなければならぬ。これは云はゞ、西歐思想の眼が東洋社會に觸れる點をとらへて、そこから東洋社會に關する問題が西歐思想にどんな影響を與へたか、またその性格を如何に決定したかを考察する事である。既に述べた様に近世の初頭以來西洋は東洋とたえず交渉して來たし、またそれ故に、東洋社會について何等かの問題を持たざるを得なかつた。併し吾々はかつて東洋社會が西歐思想に如何なる問題と影響とを與へたかについて考へて見た事があるか。「東洋社會から西歐思想を見る」ことが、西歐思想を具體的に理解する上にどんな重要な意義をもつものであるか反省して見た事があるだらうか。

吾々はいまゞで西歐思想の而も西歐的な部分にのみ注意を奪はれてゐた。そして西歐思想が東洋について何を言はうと、別にそれについてあまり關心を持たなかつた様である。これには勿論すでに述べた様に、相當の理由がある。近代の日本は明治以來西歐社會の影響につゞまれ、西歐思想にリードされて進歩して來た。それ故にアジアの事を學ぶよりも、或はまた日本自身の事を學ぶよりも、ヨーロッパの事を學んだ方が遙に進歩的であると考へる様な習性をつけられ來た。實際吾々にとつて、支那や印度の思想よりもイギリスやフランスやドイツの思想の方が身近に感じられた。吾々が例へば「世界史」と云ふ様な事を考へる時にも、やはりヨーロッパの動きが歴史の中心部分を占め、東洋社會は古代社會の典型として歴史の端緒に一回現れたきりで永久に姿を消して了ふ様なヨーロッパ的歴史觀を採用して別に怪しまなかつた。吾々は生活を通じて東洋社會の實在を感じてゐるのに、世界史の思想に於ては東洋社會を抹殺して來たのである。斯様に西歐思想の支配下にあつてこの思想の西歐的な面にのみ注目してゐた吾々は、却つて西歐思想の眞の姿を把握する事が出來ず、その機械的な模倣に陥つ

た事も少くなかつた。

一體、近世以來西歐社會を東洋社會から全く切離して考察すると云ふ事は不可能になつてゐる。西歐社會の支柱をなす産業資本の回轉は、アジア其他未開の社會の存在なしには行はれないと主張する經濟學者もある位であるが、この主張の正否はともかくとして、實際十八世紀末から全人口の半數を都市に集中させる程急速に工業化してゐたイギリスは、原料や食料品の供給地としてアジアに絶大な期待をかけねばならなかつたし、また他方ラカンシャの綿製品の六〇パーセント以上はインド、支那、其他の東洋市場にその捌口を見出し、アジアがこの莫大な貢納をつゞける限りイギリスの産業資本は安泰であつた事實も看過され得ない。従つてまたヨーロッパ社會の政治も思想も東洋社會と何等かの交渉をもち、少くとも東洋社會に對して何等かの立場を持つてゐたと云へよう。かう云ふ場合に、ヨーロッパ人の生活や思想を限られたヨーロッパの世界に隔離して見てゐるよりも、東洋社會との生々した聯關を意識して考察する方が、一そうそれ等の長所も短所も、スケールの大小も具體的に理解されるであらう。

## 六

吾々はまづスミスの「國富論」を例にとらう。從來人々が「國富論」に對して持つた問題は必ずしも同一ではないが、大體多くの經濟學者はスミスをもつて經濟學の父とし、彼以後に發達した西歐經濟學の理論、例へば價值論、價格論、分配論等の淵源を「國富論」に求めようとする態度をとつてゐた。これらの經濟理論は勿論ヨーロッパ的經濟構成を前提として成立し得るものであり、それ故にスミス經濟學の最も西歐的な部分であると云へ

よう。もしもこの部分にのみ重點がおかれるとしたら、スミスが勞銀や資本の問題を説く際にアジアの社會を考察の對象においてゐる意義は充分に了解されないだらう。併し彼の眼が西歐社會のみではなく東洋社會にも向けられたと云ふ事こそ、彼の世界史的な立場と同時にまた彼の理論の幅の廣さと強靱性を示すものであらう。これはスミス經濟學の西歐的部分にのみ注意をうばはれてゐる時には決して感じられなかつたものである。また更にスミスが對支貿易を説く際に、アジア社會の停滯性を打破つて、これを産業資本の發達の軌道に乗せようとしてゐるのを見ると、この時代の自由貿易論の進歩的性格をつかむ事が出来る。それと同時に其處にまたアジア社會をも西歐の産業社會の型に作りかへようとしてゐる意圖も窺はれて、この時代のヨーロッパの進歩主義的精神なるものゝ抽象性と限界性を指摘する事が出来るのである。

同じやうな事はまたマンチェスター派の自由貿易論についても言へるだらう。例へば、コブデンの「イギリスがもはやアジア大陸に煩累となる様な國を持たぬ時は幸福な事であらう。」<sup>10)</sup>と云ふ言葉は、アジアの諸國がそれ／＼自主的な立場でヨーロッパの諸國と自由貿易を行ふ日を待ち望んでゐる自由貿易派の善良な信仰の見本である。併しコブデンやブライトがマンチェスターのクラブで「世界から戦争をなくするために」フリー・トレードの宣傳演説を行つてゐたその時に、アジアではイギリスが武力を以て支那に開港を強要してゐた事實を想ふがよい。この支那に對するイギリスの行動は、通商を拒む東洋諸國に對してはあくまで武力を以て障壁を破壊し、新たな通路を建設しようとする産業資本の力強い意欲が平和主義的な自由貿易論の背後にかくされてゐる事を暗示してくれるのである。自由貿易論はマンチェスターのクラブで聴くよりも、東洋社會より觀た方がはつきりその

10) ハンス・コオン、アジア民族運動史（立花士郎譯）8～9頁。



本體をつかめさうである。

さて、吾々は次に自由貿易の時代を去つて、ヨーロッパの諸國が漸く帝國主義の段階に入らうとする時に、自由主義的、世界主義的思潮への反動として起つた歴史主義なるものを考へて見よう。歴史主義は一應ヨーロッパ内部に於ける諸國民の政治的、經濟的對立にその起源を求める事が出来るだらう。例へばリストの歴史主義的、國民主義的經濟學はイギリス産業資本の經濟的侵略よりドイツの市場を護るために、ドイツ經濟はイギリス經濟よりも後れた歴史的段階にある事を明かにして、自由貿易とは異なる保護政策の必要を説いたものであると言はれてゐる。併し同じドイツでも、かのカール・ビュツヒヤーの所謂「經濟發達段階説」は、この世界の内にまだヨーロッパ諸國の到達してゐる「國民經濟」の段階より見て遙に後れた低度の社會が實在する事實に基いて打立て始めて明かにされたものである。さうであるとすれば、歴史主義なるものは必ずしもヨーロッパ内部の事情からではなく、むしろヨーロッパ外部の事情から説明しなければならない側面があるのではないだらうか。これは更に歴史主義的思潮が經濟の後進性を自覺したドイツにだけ生れたものではなく、却つてその當時世界最高の發展段階にある事を自負してゐたイギリスにも存在してゐた事實を考へると一そう明かになる。勿論イギリスの歴史主義はフランス革命の波及、大陸の社會運動、イギリスのチャーチスト運動の勃發につれて市民階級や貴族階級の内に醸成された保守的感情より説明出來よう。併しこのヨーロッパ内部の事情と密接な關係に於てまた次の様な事情も考慮されねばならない。それは即ち當時のイギリスがアジアに對する支配を確立して、その内部にヨ―

ロツパ社會と根本的に異なる様々の社會を含む一大植民帝國となつてゐたと云ふ事である。殊にイギリスのインドに對する植民的經營の進むにつれて、スミス、リカルドの經濟學では割り切れない東洋社會の姿が次第に明かにされたと云ふ事實は、英本國內で自由貿易論や世界主義への信仰が動搖して、各國の歴史的事情を再認識しようとする歴史主義的經濟學が生れるに至つた事情を説明する。これはミル、マルサス、殊にリチャード・ジョオンズの經濟學を見ると容易に了解出来る。<sup>11)</sup> 併し東洋社會が西歐思想の方向轉換に貢獻した事は、經濟學の領域よりも法律學や社會學の領域で一そう明瞭に指摘される。例へば、ヨーロッパ的、市民的法概念を普遍的な法概念にまで上昇させようとするゼレミイ・ベントムやジョオン・オウスチンの分析法學に對して、ヘンリー・メインは歴史法學の立場から批判を加へたが、この歴史主義的批判はインドに於ける村落共同體の認識に根據をおいてゐたのである。これらの場合には、東洋社會は西歐思想の基本的な性格を決定するに重要な關係を持ち、西歐思想の内部に於ける自己批判や方向轉換に重大な影響を與へてゐると云へよう。

## 七

吾々はこれまで「西歐思想に於ける東洋社會論の意義」と云ふテーマの下に、東洋社會と西歐思想との關係を互に異なる二つの見地から論じて來たつもりである。それは即ち先づ西歐思想より東洋社會を觀ると云ふ事であり、次に東洋社會より西歐思想を觀ると云ふ事であつた。併し實はこの二つの見地は互に對立しあつてゐるものではなくて、東洋社會を科學的に考察しようとする人々の研究過程の中に自ら統一されて來なくてはならないものである。まづ吾々は東洋社會の科學的研究に於て、相當の傳統を持つてゐる西歐思想を無視したり、排斥した

11) 拙稿、英國經濟學に於ける東洋社會の理論（經濟論叢，52卷1號）。

りする事は出来ないであらう。東洋社會に關する西歐の理論を利用すると云ふ事は、必ずしも西歐的偏見に陷る事ではない。吾々がむしろ警戒しなくてはならない事は、西歐理論の圖式を機械的に、無意識的に適用する事なのである。例へばヨーロッパの學者は「停滯的社會」と云ふ様な概念を以て、しばしば東洋社會の性格を明かにしようとする。吾々がこの「停滯的社會」なる概念を借用する場合に、この言葉が西歐思想によつて如何なる根據から採用されたか、又如何なる意味を持つてゐるかを知らなくては、東洋社會は永久に西歐社會の下に低位の社會として止まつてゐると云ふ西歐的偏見に無意識裡に陷る結果になるかも知れない。東洋社會の進歩は複雑であり、複合的である。進歩に於ける停滯と停滯に於ける進歩とを慎重に識別せずして、輕々に判斷を下す事は禁物である。

西歐思想の優れた點を認めつつ、而も西歐的偏見に陷る事を避けるためには、いままであまりに吾々の身近に立つてゐた西歐思想を一定の距離をおいて見る事が必要である。これが私の云ふ東洋社會より西歐思想を觀ると云ふ態度である。これはつまり、東洋社會との關係に於て西歐思想を、或はまた西歐的東洋論を批判し検討しつつ、いままで吾々の氣附かなかつた具體的な性格を把握し、その限界と長所とを識別する事である。かくして始めて西歐思想を吾々のものとして、本當に吾々の立場から意識的に東洋社會の分析に適用する事が出来るだらう。